104 誌上発表

出雲岩崎家所蔵の古医書

天野　陽介，小曽戸　洋
北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部

出雲市佐田町八幡原の旧家・岩崎家には古文献が多数伝えられており，その中には近世初期の日本医学の実情を伝える古医書がおよそ31点現存している．演者らは平成23年10月11日に出雲市役所文化財科の担当官とともに岩崎家を訪ね，調査を行ったので，その結果を報告する．

岩崎家所蔵の古医書の9割方は中世末～近世前期の写本である．岩崎家が医を業としたのは16世紀後半，安土桃山時代の岩崎宗右衛門尉に始まるという．曲直瀬道三と出雲の地は浅からぬ縁がある．宗右衛門尉に医学を伝授したのは，清安斎恵心で，いまのところこの人物について知る資料は見い出せないが，道三の門人に違いないと思われる．それを示す資料は『七表陽脈主属之図』と『宜禁集』である．両書ともいまは巻子装となっているが，もとは折巻紙であった．『七表陽脈主属之図』は「七表八裏九道」の脈診を示した文書で，同じ内容のものが寛永刊の『切紙』にも収録されている．『切紙』では本文書を「診候薬註一紙之約術」と題しており，「元亀4年上元日雖知苦斎盍静翁道三」の奥書がある．本文書は道三の弟子である恵心が道三の切紙を天正13年9月に写し，岩崎宗右衛門尉に与えたものである．一方，『宜禁集』は『切紙』にはない文書である．食品の好し悪し（宜・禁）について記したいわゆる食養書で，本文書には，翠竹斎道三の著を恵心が一紙にまとめ，天正14年5月に岩崎宗右衛門尉に与えた旨の奥書がある．道三は天正2年，綸言により雖知苦の号を翠竹に改めたから，この著作は天正2年以降であることがわかる．道三には『宜禁本草』など類似の食養著作があるが，本文書と内容の合致する書の存在は他に知られない．両書ともに道三の医学の相伝実態を示す貴重な16世紀の文書である．このほか恵心から岩崎宗右衛門尉に伝授した書に天正14年の奥書をもつ『総薬炮製部』がある．また『小児方』には雖知苦斎道三の著者名があり，内容は世に知られる道三の『遐齢小児方』と同類である．『捷径弁治集』も同じく雖知苦斎道三の著で，本書には奥書はないが，他本から天正5年の成立であることが知られ，本書は成立からまもない天正年間の古写本と推定しうる．

最も古い写本は，永禄13年菊月の奥書をもつ『医家秘伝随用加減十三方』である．本書は元の徐用和の著で，中国版本に永楽・嘉靖・万暦刊本ほかがある．『加減十三方』は，13の主要処方を挙げ，病症によって複合生薬構成を加減して応用範囲を拡げる法を記した医書で，その医法は，世に広く流布した．岩崎家本は万暦版以前の古写本であるから，あるいは嘉靖版に由来するかと思われる．日本における明版中国医書受容の初期過程を示す貴重な資料といえよう．

このほか元亀2年の奥書をもつ『牛黄円方口伝等』，天正5年の奥書をもつ『病人禁好食』，天正13年の奥書をもつ『眼病』，同じく『小児方奇効良方抜書』，天正15年の奥書をもつ『牛之書少々』など，安土桃山時代の古写本がある．『病人禁好食』には「竹田城州（兵庫県朝来郡和田山）之定本書書写畢堅可禁也時天正五年丁丑林鐘吉辰悪筆書之」と相伝を示す奥書がある．本書はのちに刊本となった『諸病食性禁好物』『諸疾禁好集』『諸疾宜禁集』などと同類の内容をもち，その祖型を示す古写本として資料価値が高い．古写の医書はほかに10余点ある．

刊本の医書は『医方大成論』『薬性能毒』『類証弁異全九集（巻7）』の3点があるが，とりわけ『医方大成論』は貴重書として岩崎家文書中の白眉である．『医方大成論』は文禄5年版を嚆矢に，古活字版が10種出版された．本書は「慶長壬子仲秋日於雲州塩氏平宣政開版」の刊記をもつ古活字版で，他に現存が龍門文庫にしか確認されない稀覯書である．「版式の整った美事な刻本」（川瀬一馬）であるとともに，雲州平宣政版が出雲の地に伝えられる点，文化財としての価値は一層高いといえる．